

原始仏教における四禅と四無色定

金 亨 俊

原始仏教の禅定修習において四禅 (cattāri jhānāni) と四無色定 (catasso ārupa-samāpattiyo) は、ゴウタマの出家と修行、悟りと涅槃と関わり、そして成道以後展開する原始仏教禅定論のなかで重要な位置を占めるとともに、結果的には最終的な形として九次第定という禅定論を生みだしている。本稿においては、こうした最終的な禅定論としての九次第定の要素として、四禅→四無色定という関係がどのように成立するかについて考察してみたい。

今まで四禅と四無色定の研究は、主に両禅定の根源を求める成立史的研究が行われ、結果的には九次第定を三界思想等の外縁の影響による論理的構造として考えているようである。しかし、原始経典のなかで登場する両禅定の関係を実修の側面からみると、必ずしも四禅→四無色定の構造が非実修の論理的構造に過ぎないとは考えられない。すなわち、両禅定には、構造的に次第関連をもつ要素があることに注目したい。

まず、両禅定の特徴をみると、元々四禅は「ある特定の」心修習によって得られる到達の境地 (心一境性) を四段階のレベルに分けて表わした禅定論であり、四無色定は到達の境地とそれに至る為の対象を共に含んでいる禅定である¹⁾。言い換えれば、四禅は到達の為の所縁 (修習対象) を要するが、四無色定はそれ自体が一つの独立したシステムである。

このような両禅定の間を Visuddhimagga (以下 Vism) では、禅と業処との関係をもって説明している。

Jhānāppabhedato ti appanāvaheṣu c'ettha ānāpānasatiyā saddhiṃ dasakasiṇā catukkajjhānikā honti. Kāyagatāyasatiyā saddhiṃ dasa asubhā paṭhamajjhānikā. Purimātayo brahmavihārā tikajjhānikā. Catuttharabrahmavihāro cattāro ca āruppā catukkajjhānikā ti evaṃ jhānappabhedato.²⁾

「禅の区分よりとは、安止に導く〔三十業処のなか〕安般念と十遍とは四禅種〔初禅ないし第四禅〕に属す。身至念と十不浄とは初禅に属す。初三梵住〔慈・悲・喜〕は三禅種〔初禅ないし第三禅〕に属す。第四梵住と四無色とは第四禅に属す。このように禅の

区分より〔業処の選択を知るべきである〕。』

ここでは、四禅と三十業処との配分が行われ、修習法どうしの優劣を決めている。四禅それぞれの境地に至るには、安般念、十遍、身至念、十不浄、四無量、四無色がその対象になるという。このような構造は、究極的に四禅を心修習によって得られる様々な証果の象徴として見ているのであって、四禅を中心とする業処の分類を通して原始仏教の禅定論を統合しているのが分かる。即ち、原始仏教の禅定論において四禅は、禅定修習の結果を統合するという、いわば海のような位置を占めるのである。この Vism の説からみる限り、四無色は第四禅の所縁（対象）になるので、修習関係はむしろ逆の方面（謂わば四無色定→四禅）に成立する。

しかし、このような四禅の性格（統合性）にも拘らず、四禅→四無色定という関係をもつ独特な禅定論が成立したのは何故であろうか。

まず、四禅→四無色定の関係を成立させた内縁的要因は、第二禅における無尋 (avitakka)・無伺 (avicāra) と空無辺処における種々想の不作 (nānatta-saññānaṃ amanasikāra) との関係と、第四禅における念 (sati) と非想非非想処における想 (sañña) との関係から求めることが可能であろう。

元々四禅を象徴する主なポイントとは、尋 (vittaka)・伺 (vicāra)・念 (sati) であり、特に尋伺の止滅による清浄なる sati の獲得を主な特徴としている。しかし、四禅の構造上、尋伺の滅する時点と言うのは第二禅であるにも拘らず、四禅全体を“無尋無伺の三昧”，“尋伺の滅”として表現したり³⁾、あるいは聖なる沈黙といって第二禅の修習を勧めている場合がある⁴⁾。これは、当時仏教内外で禅定修行の大きな課題が尋伺の止滅にあったということをいうのである。

さらに空無辺処についてみると、空無辺処の境地のなかには、種々の想を憶念しないことから (nānatta-saññānaṃ amanasikāra) “空は無限なると思念する”，というが、ここで種々想を憶念しないということは、いわば第二禅の尋伺の滅した境地のように思わせる表現である。また、非想非非想処における想というのは、文字通りに理解すれば、‘想でもなく非想でもない境地’ということになるので、これは想という言葉では表現できないもう一つの‘想たるもの’を想定しているとみられる。これはまるで尋伺という思惟作用が止滅して残る‘念’という構造と類似していることがわかる。言い換えれば、尋伺の滅によっては清浄念の獲得と空無辺処への移行という二つの方向が可能になるのである。

結局、四禅→四無色定という修習構造が成立するのに大きな手がかりは、四禅

をどういう立場でみるかの問題であろう。前述したように、四禅は（余他）心修習によって得られる心一境の境地を表わした禅定論ではあるが、他に思索（智恵）の為の予備禅、即ち単なる精神集中の意味としての禅定、というもう一つの性格をもっていることがわかる。前者の立場からみると、四禅はそれ自体で完全な修行の果をもたらすので、四禅→四無色定の関係は成立し難くなる。しかし、後者の立場からみると四禅はあらゆる思索のまえに置かれるべき予備禅となるので、後続する禅定として四無色定が位置するのは決して不自然ではなくなる。なお四禅が八正道の正定として⁵⁾、五根の中の定根として⁶⁾、あるいは四無量に移行する前の禅定として⁷⁾説かれるのは、こうした精神集中としての四禅の性格をいうのである。従って、両禅定の最終的な統合形として現われた九次第定も、単なる三界思想に合せた構造というよりは、それなりの修習内容を有する禅定論であることがわかる。

- 1) DN. III, pp. 222-224. 四禅と四無色定は、殆どが定型的な形態を見せており、四禅の方が四無色定より頻度も多く、明確な修習果を提示している。
- 2) Vism, p. 111.
- 3) SN. IV, pp. 298-299.
- 4) SN. II, p. 273.
- 5) MN. III, p. 252. SN. V, p. 10
- 6) SN. V, p. 196.
- 7) DN. II, pp. 186-187

〈キーワード〉 vittaka, vicāra, sati, sañña

（佛教大学大学院）

新刊紹介

大正大学総合佛教研究所
声聞地研究会・密教聖典研究会 著

梵語佛教文献の研究

B 5 判・363頁・定価 15,450円
山喜房佛書林・1994年11月